

わが恩師。

私を創った「あの人」



小学校の恩師の言葉を礎に日々鍛錬

朝日ビジネスコンサルティング社長

古川 武史

人生において最初に影響を受けたのは、小学5、6年生の担任をして下さった日野正則先生である。小さいころの私はやんちゃで、良い意味でも悪い意味でも目立つ存在だった。その一方で、親からは大変厳しくしつけられたため、年長者への礼儀や年少者への慈愛はわきまえていたように思う。

当時の私には、自分中心に物事を考えてクラスを引っ張っていくという傾向があった。先生や仲間ともうまくやっていたので、あまり注意されることもなかったのだが、5年生時に日野先生にひどくしかられたことがあった。「自分中心に世の中がまわっていると考えるのはいかん。常に相手を中心に物事を考えなさい」と。これは卒業までの2年間、ずっといわれ続けた。ほかにも「児童会長をやんなさい」とか「色んなことにチャレンジしなさい」などと、ことあるごとにアドバイスをしてくれた。その背景には「相手のことを中心に考えて行動ができる人間になるために必要なこと」とのお考えがあったようだ。

また、卒業時には「克己」という言葉を贈っていた。この言葉は「相手のことを

考えて行動をしない」という教えと相まって、現在の行動規範の基礎になっている。

例えばコンサルタントの仕事をしていると、無意識のうちにやりたいことだけをやるうとしていて自分に気づくことがある。日野先生の教えはそんな自分にブレーキをかけてくれるとともに、相手のことをおもんばかるように促してくれる。これは自分がやりたいことなのか、相手にとって価値があることなのかと。コンサルタントは、変革をしたいという企業のニーズと自らのやろうとしていることが合致してはじめて良いソリューションを提供できるものである。その意味では日野先生の教えは非常に重いものである。

日野先生の教えを基礎にしている私ではあるが、コンサルタントになってからは出会



現在の行動規範の基礎を作ってくださった日野正則先生

う方々すべてが私の恩師であると思っっている。クライアントとは本音で話さないと良い解決方法は得られないため、当然、共に濃密な時間を過ごすことになる。人間として、経営者として、ビジネスパーソンとして、その方々の経営判断に至った考え方や行動から得るものは多く、私の大きな宝になっている。

また、次世代のリーダー養成を目指した「九州・アジア経営塾」(KAIL)を通して出会う方々から学ぶことも少なくない。発足時からKAILに関わっている私は、現在プログラム・アドバイザーを務めており、さまざまなタイプの方々と接点を持つ機会を得ている。特にその道のエキスパートである講師の方々の打ち合わせでは、深く考えさせられることが多く、自分の鍛錬の場にもなっている。

多忙を極める毎日ではあるが、自分自身が鍛えられるこの環境が今は必要だと思っっている。クライアントや地域社会に、より頼りにされる存在になるためにはもつと鍛錬が必要だと考えるからだ。厳しい環境でもさらに自分を高めていき、みなさまへの恩返しができるばと考えている。